

# 萩が咲く

佐伯 仁

萩よ、美しき女性よ・・・

9月、長月。快い風に揺れる花は萩・・・

季節に敏感な万葉人は萩を称え、

「万葉集」に百四十二首、第二位の梅の花の百二十四首を大きく離している。

山上憶良の有名な「秋の七草」の歌でもトップに詠まれている。たしかに萩は草冠に秋と書く。まさに秋を告げる花といえよう。咲く姿は可憐でも秋風にこぼれ散る花は衰しい、その愛らしさと切なさに魅され、万葉人が愉しんだのは「萩の花見」・・・

萩に憧れる心は“花の名所”を生んだ。当時の風流な貴族が愛したのは飛鳥、高円、春日野・・・花盛りの名所を今は亡き貴人と訪れ、在りし日の面影を偲んで詠んだ挽歌（巻二・二三一）も残っている。現代でも大和路の花の寺、白毫寺や新薬師寺の人気は高い。

一方、江戸期、文化六年（一八〇九）商人と文人の手になる「向島百花園」は今も健在、見所は「萩のトンネル」。全長三十メートル、園内で一際目立つ赤や白の萩の花のパレード。来園者が喜々としカメラを向ける後ろ姿に今は亡き園芸好きの先輩の言葉が重なる。

「萩」の花は健気に生きる女性の姿にも似て美しい・・・と。

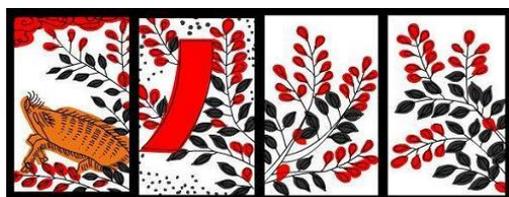
まどろむや ささやく如き 萩紫苑 杉田久女



白毫寺山門前の萩



向島百花園「萩のトンネル」



花札七月「萩と猪」